



## 六朝の人の詩は当に神を以て会すべし : 「池塘生春草」を中心に

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 荒井 礼  |
| 雑誌名 | 中国文化 : 研究と教育  |
| 巻   | 74  |
| ページ | 14-26   |
| 発行年 | 2016  |
| URL | <a href="http://doi.org/10.15068/00151024">http://doi.org/10.15068/00151024</a> |

# 六朝の人の詩は当に神を以て会すべし

—「池塘生春草」を中心に—

荒井 礼

はじめに

清の王漁洋（一六三四—一七一）の『古夫于亭雜錄』  
卷二に次の一節がある。

①「宋景文」又云、「左太冲『振衣千仞岡、濯足万里流』、  
不減嵇叔夜『手揮五絃、目送飛鴻』」。愚按、左語豪矣、  
然他人可到、嵇語妙在象外。六朝人詩如「池塘生春草」、  
「清暉能娛人」、及謝朓・何遜佳句多此類。讀者当以神  
會、庶幾遇之。顧長康云、「手揮五絃」易、「目送歸鴻」  
難」。兼可以悟画理。

（又た云ふ、「左太冲の『衣を振ふ 千仞の岡、足を  
濯ふ 万里の流れ』は、嵇叔夜の『手は五絃を揮ひ、  
目は飛鴻を送る』に減ぜず」と。愚按ずるに、左の語  
は豪なり、然れども 他人も到るべし、嵇の語の妙は  
象外に在り。六朝の人の詩の「池塘 春草生ず」、「清

暉 能く人を娛しましむ」、及び謝朓・何遜の佳句の  
如きは此の類多し。読む者は当に神を以て会すべくん  
ば、之れに遇ふに庶幾からん。顧長康云ふ、「手は五  
絃を揮ふ」は易し、「目は歸鴻を送る」は難し」と。  
兼ねて以て画理を悟るべし）。

王漁洋はその詩論において「神韻」を提唱した。彼の言  
う「神韻」は、徹底的に練りこまれた措辞によって読者に  
興趣を引き起こさせる作品をいう。それは、縁情・言志よ  
りはむしろ修辭に重点を置いた詞的な芸術志向型の作品で  
ある<sup>①</sup>。次の文章は、その神韻の特徴を端的に示している。

②趙子固梅詩云、「黄昏時候朦朧月、清淺溪山長短橋。  
忽覺坐來春盎盎、因思行過雨瀟瀟」。雖不及和靖、亦  
甚得梅花之神韻（王漁洋『居易錄』卷六）。

（趙子固の梅の詩に云ふ、「黄昏的時候 朦朧の月、  
清淺の溪山 長短の橋。忽ち覺ゆ坐來 春盎盎たる

を、因つて思ふ 行き過ぐ 雨瀟瀟たるを」と。和靖  
〔林逋〕に及ばずと雖も、亦た甚だ梅花の神韻を得た  
り。

②の趙子固の詩は題面詩であり、宋・周密「癸辛雜識」  
前集に見える。「黄昏（双声）・「朦朧（疊韻）・「盎盎・  
「瀟瀟」などの音声的要素の強い疊字で句中対や対句を作  
り、「清浅」・「長短」など程度・距離を伝えるのに視覚的  
要素の強い複合語を句中対として用いることで読手のイメ  
ージを助けている。さらに、初め二句の「黄昏」と「清浅」  
の対句は宋・林和靖の「疏影横斜して水清浅、暗香浮动し  
て月黄昏」（「山園小梅」詩）を意識した措辞になっており、  
これによって趙子固の詩においても、月光に照らされる「疏  
影」が、雨の降りやんだ後の盎盎たる春の気にひそかに香  
る「暗香」が想見される。語の持つイメージを駆使して梅  
の姿を象徴的に描き出し、聴覚的にも視覚的にも人の興趣  
を引く巧みな措辞である。これが漁洋の所謂「神韻」を得  
た詩である。こうした表現を可能にするためには、言葉に  
ついての知識、即ち「学問」や「素養」と、それを駆使す  
る「才能」が必要である。

従つて、①に見える六朝の人の詩は「当に神を以て会す  
べし」というのも、単純に「心」や「情」によって詩を理

解せよというのではない。巧みな措辞によつて得られた  
「神」なる表現に留意して詩を解すべきだということであ  
る。これにはやはり、読者も作者と同等の「学問」と「才  
能」を持つことが望ましい。

一般的に修辭主義に傾いたといわれる六朝の詩に、芸術  
を志向する「神韻」があると見做されるのは至極自然なこ  
とといえる。①に詩や名前が挙げられている謝靈運や謝朓  
らも、とりわけ「修辭に関心をもつた表現派の詩人たち」  
とされている<sup>(2)</sup>。漁洋の「神韻」と六朝詩との関連性は決し  
て弱くない。しかし、これまで漁洋の実作や唐詩・明詩の  
「神韻」を論じたものはあるのに、六朝詩の「神韻」を具  
体的に論じたものはなかった。そこで、①に挙げられた詩  
句のうち、特に従来言及されることが多く、批評資料も豊  
富な謝靈運の「池塘生春草」（「登池上楼」）、『文選』卷二十  
二）を中心にとりあげ、①においてこの句の導入となった  
嵇康の詩にも言及し、六朝詩の「神韻」を論じてみたい。  
なお、「清暉能娛人」（謝靈運「石壁精舍還湖中作」同上）  
については紙幅の都合上、別の機会に考察を加えたい。

一、日に鍛へ月に鍊り然る後に洞曉すれば味ひ有る  
を覚えん

「池塘生春草」は、その句の誕生にまつわる故事によって注目されている。謝靈運は従弟の謝惠連に会うと、いつも良い句が得られた。うまく詩ができずに悩んでいた時のこと、夢に恵連に会って、「池塘生春草」の句ができた。

そのため、靈運は「この句は神助によるもので、わが言葉ではない」と言っていた。<sup>(3)</sup> こうした神秘的な話があるためか、後の詩評においては謝靈運のこの句が間々とりあげられる。

まず論点になるのがその妙意はどこにあるのかである。王安石がこの句は「神助」によるもので、妙意があると認めてから、「池塘生春草」のその後の地位は確定した。しかし、その妙意がどこにあるのかを説明することはできなかった。李元膺はなぜこの句が優れているのか分からないとし、釈惠洪はこの句に妙意を見るか否かに拘泥するよりも、この句を生みだすきっかけになった謝靈運の恵連に対する「情意」をこそ論ずべきだといふ。<sup>(4)</sup>

右の評論は、句そのものよりも、その句にまつわる故事に重点を置いて展開されていたが、しだいに句そのものについて論じるものも現れてくる。

③ 「池塘生春草、園柳變鳴禽」、世多不解此語為工。蓋

欲以奇求之耳。此語之工、正在無所用意。猝然与景相遇、借以成章、不假繩削。故非常情所能到。詩家妙处、当須以此為根本。而思苦言難者、往往不悟（宋・葉夢得『石林詩話』卷中）。

〔池塘 春草生じ、園柳 鳴禽変ず〕、世 多く此の語の工為るを解せず。蓋し奇を以て之れを求めんと欲するのみ。此の語の工は、正に意を用ふる所無きに在り。猝然として景と相遇ひ、借りて以て章を成し、繩削に仮らず。故より常情の能く到る所に非ず。詩家の妙处、当に須らく此れを以て根本と為すべし。而して思ひ苦にして言難き者は、往往にして悟らず）。

〔用意〕、即ち作為の見えないことが優れているとする。自然な趣を尊ぶのは、詩が理に傾いた宋代にしばしば見られる論調である。③が指摘するように、「池塘生春草」には、「思苦（苦心）」や「言難（分かりづらい言葉）」など見えず、出逢った景色をそのまま切りとってきたようである。しかし、この句に修辭的な技巧を見出す論もある。

④ 晋以還、方有佳句。如淵明「採菊東籬下、悠然見南山」、謝靈運「池塘生春草」之類。謝所以不及陶者、康樂之詩精工、淵明之詩質而自然耳（宋・嚴羽『滄浪詩話・詩評』）。

(晋以選、方めて佳句有り。淵明の「菊を採る 東籬の下、悠然として南山を見る」、謝靈運の「池塘 春草生ず」の如きの類なり。謝の陶に及ばざる所以の者は、康樂の詩は精工にして、淵明の詩は質にして自然なればなるのみ)。

④の論旨も③と同様に、表現が自然であることを尊ぶものである。共に佳句と見做されながらも、謝靈運が陶淵明に及ばないのは、その句が「自然」ではなく「精工」であるためだという。④は「池塘生春草」に用意工夫が施されている可能性を示している。

これらの詩評を承けて、謝靈運がこの句を生みだすために苦心していたことを具体的に述べるものに、宋・曹彦約の「池塘生春草説」(『昌谷集』卷十六)がある。

⑤「牂羊墳首、三星在罽」、言不可久。古人用意深遠、言語簡淡。必日鍛月鍊、然後洞曉其意及思、而得之、愈覺有味。非若後人一句道尽也。晋宋間詩人、尚有古意。謝靈運「池塘生春草」之句、説詩者多不見其妙。此殆未嘗作詩之苦耳。蓋是時春律將尽、夏景已來、草猶旧態、禽已新声。所以先得夏夏一句、語意未見、則向上一句、尤更難著。及乎惠連入夢、詩意感懷、因植物之未變、知動物之先時、意到語到。安得不謂之妙。

(「牂羊墳首、三星 罽に在り」とは、久しかるべからざるを言ふ。古人の用意は深遠にして、言語は簡淡。

必ず日に鍛へ月に鍊り、然る後に其の意と思とを洞曉し、而して之れを得なば、愈いよ味ひ有るを覚えん。

後人の一句の道ひ尽くすが若きに非ざるなり。晋宋の間、詩人、尚ほ古意有り。謝靈運の「池塘 春草生ず」

の句、詩を説く者 多く其の妙を見ず。此れ殆ど未だ作詩の苦しみを管めざるのみ。蓋し是の時 春律 將

に尽きんとし、夏景 已に來たり、草 猶ほ旧態、禽 已に新声なりしならん。所以に先づ夏夏の一句を得たるも、語意 未だ見ず、則ち向上の一句、尤も更に著

はし難し。惠連の夢に入るに及びて、詩意感懷し、植物の未だ變ぜざるも、動物の時に先んずるを知るに因

り、意到り語到る。安んぞ之れを妙と謂はざるを得んや)。

「牂羊墳首、三星在罽」は、『詩經』小雅・苕之華の句である。毛伝に拠れば、幽王の時、蛮族に攻められ、周王朝が滅びようとしていることを詠じている。言うところは、牝羊の首が大きいのは責めても仕方がない、同様に周室を再興せよと責めても詮無いこと。三星(心宿)が川に仕掛けた漁具に映っては瞬く間に消える、同様に周室も長くは

もたないということである。⑤は、伝えたい事と言葉による表現の一致が容易ではないこと、これを体得するには日々の鍛練が必要であることを述べる。『詩経』が社会的意義を含むのとは「意思」の次元を異にするとはいえず、謝靈運の句も容易に作られたものではないこと、春夏交替の微妙な一コマを写しだした斬新な表現であることを指摘する。殊に、「必日鍛月鍊、然後洞曉其意及思、而得之、愈覺有味」の一文は、①の「当以神会、庶幾遇之」と相通じる主張である。

清の王夫之は、この句を景情一致の例としてとりあげ、『詩経』大雅・抑の「訶謨定命、遠猷辰告（訶いに謨りて命を定め、遠く猷りて辰に告ぐ）」の意をまとめ、<sup>(5)</sup>「国政を担うところざし」を描出したものとする。

以上の論を概観すると、その論旨の是非は措くとして、「池塘生春草」は、一見「用意」を凝らしていないようであるが、「日鍛月鍊」した「精工」な詩句という見解が多勢を占めていた。③が主張するような作為が見えないというのも、実のところ工夫・苦吟の成果であると言える。

## 二、詩中における特異性とはたらき

「池塘生春草」は、その制作にまつわる故事も相俟って

か、しばしば評論にとりあげられてきた。各論によって、この句が「苦吟」のすえの「精工」な作であると思われされていたことは分かった。しかし、具体的にどこが「精工」なのかは、漠然としてはつきりしない。⑤が次句との影響関係を説き、作詩上の苦心を述べているが、それだけでは結局③の巧みな風景描写の句という評価に帰着するであろう。そして、巧みな風景描写という点のみでこの句を論じるなら、④のように陶淵明の方が優れるという意見もあり、宋の李元膺が他の句に比してどこが優れているのかわからないというのも致し方がない。

とはいえ、この句が取りあげられるのにはやはり相應の理由がある。王夫之は、この句と妙意が通じるとして、『詩経』の「楊柳依依」といった句を挙げる。この『詩経』の句も、これだけではただの風景描写であるが、この歌を詠って出征兵士を労うという背景があるために、別れの場面での悲しみと、無事に還ってくることを祈る思いを添える舞台装置としてはたらいっている。<sup>(6)</sup>この句が詩にどのような作用を及ぼし、どう特殊なのかは、詩全体の中に置いて見たとき、はじめて明らかになるのである。これは、謝靈運の句にも当てはまるであろう。王夫之は次のようなことも言っている。

⑥始終五転折、融成一片。天与造之、神与運之。嗚呼、不可知已。「池塘生春草」、且従上下前後左右看取、風日雲物、氣序懷抱、無不顯者。較「胡蝶飛南園」之僅為透脱語、尤広遠而微至（『古詩評選』卷五、「登池上楼」詩評）。

（始終 五たび転折し、融して一片と成る。天 与ために之れを造らしめ、神 与に之れを運らしむ。嗚呼、知るべからざるのみ。「池塘 春草生ず」すら、且つ上下前後左右従り看取すれば、風日雲物、氣序懷抱、顯かならざる者無し。「胡蝶 南園に飛ぶ」の僅かに透脱の語を為すのみなるに較ぶれば、尤も広遠にして微至なり）。

ここに見える「神」は、対になっている「天」と同じく超自然的な概念として用いられている。「神助」と同様の一種の「ひらめき」と解せる。「不可知」と言うのはそのためである。そして、「池塘生春草」の一句は、上下前後左右から見れば、自然景物や四季の変化、人の思いといったものまでが読みとれるという。これは、この句が単に「透脱語（いかにも自然らしい言葉）」であるだけでなく、更に「広遠（ひろがり）」と「微不至（繊細な奥ゆき）」を具えているからでもある。⑥の評を見れば、「池塘生春草」の妙を知るには、句の上下前後左右を見る必要があるという

ことがわかる。

そこで、この句を詩全体の中に置いて、あらためて見てみたい。

⑦潜虬媚幽姿、飛鴻響遠音。薄霄愧雲浮、棲川怍淵沈。進德智所拙、退耕力不任。徇祿反窮海、臥痾對空林。傾耳聆波瀾、舉目眺嶺嶽。初景革緒風、新陽改故陰。池塘生春草、園柳變鳴禽。祁祁傷幽歌、萋萋感楚吟。索居易永久、離群難處心。持操豈獨古、無悶徵在今。（潜虬 幽姿媚うぶしく、飛鴻 遠音響く。霄に薄りては雲の浮かべるに愧ぢ、川に棲みては淵の沈めるに怍はづ。進徳には智の拙き所、退耕には力 任へず。祿を徇めて窮海に反り、痾に臥して空林に對す。耳を傾けて波瀾を聆き、目を挙げて嶺嶽を眺む。初景 緒風を革め、新陽 故陰を改む。池塘 春草生じ、園柳 鳴禽變ず。祁祁として幽歌を傷み、萋萋として楚吟に感ず。索居 永久なり易く、離群 心を処き難し。操を持するは 豈に独り古へのみならんや、悶え無きは 徵 今に在り）。

詩全体の中に「池塘生春草」の二句を置くことで、その特異性が際立ってくる。「潜虬」・「進徳」・「緒風」・「祁祁」などの他に出典が求められる語や、「怍」・「痾」といった

簡易な文字に書き換えが可能な語の用いられる中で、「池塘生春草」の二句は、その周囲をかこむ句とちがつて、特別に注釈を必要とするような語が見当たらない。六臣注を見れば、ほかの句には出典・語釈・大意などが見えるが、「池塘生春草」の二句には、劉良が「塘、堤也。鳴禽、鶯也」と注するのみである。

「潜虬」・「飛鴻」の句は、それぞれ「棲川」・「薄霄」の句に対応し、この四句が「進徳」・「退耕」の内容を暗示するなど、句と句が複雑で連鎖的なつながりを見せるなか、「池塘生春草」の二句は、他の句との関連性が稀薄である。一応、「初景」・「新陽」の二句と季節の移り変わりを描写する点に関係を見出せはする。しかし、「潜虬」等の句のような後に繋がる暗示性も無ければ、複雑な連続性も無い。前後の句が、陰陽説や『詩経』・『楚辞』を下地にしているの<sup>(8)</sup>に比して、典故も作爲的な措辞も何ら用いていないように見える。詩全体を俯瞰すれば、まるで「池塘生春草」の二句だけが、他の句と架け橋を断絶された絶海の孤島であるかのようなのである。こうした一見、修辞を放棄したように見えることこそが、この句の特異性であるのかもしれない。修辞を凝らした周囲の句と比して異質であるからこそ、謝靈運をして「我が語に非ず」と言わしめたのである。謝

靈運のこの語は、「修辞を凝らしたいつもの自分の言葉とは思えない」という意識から出ているのではないだろうか。ただし、「池塘生春草」の二句が真に優れているのは、修辞が凝らされていないように見えて、実は用意工夫が凝らされた句であるということ、諸詩論が述べるとおりである。まず、「池塘」の語であるが、この語を登場させることで、この詩を「登池上楼」の詩たらしめている。この詩には、「虬」・「窮海」・「波瀾」など水に関係する語が用いられているが、これらの語だけでは、そこが「池のほとり」であると確定できない。先行する「挙目」の句とこの「池塘」の語が登場してはじめてそこが「池上の楼」であることが確定される。これによってこの作品が「池上の楼」からの風景を詠じ、それを軸に作品を展開しているのだと分かる。詩題との調和がなされるのである。詩題を作者自身が付しているのかは、常に注意を払わなければならないが、少なくとも、すでにこの詩題を目にした読者からすれば、詩題との調和を果たすものとして意識させられる。それだけの力をこの句は持っている。この句に至るまでは象徴的な内容が近づき、いかなる風景に感じて作詩されたのかを見失いそうになるが、「池塘」の句が象徴性に傾いた詩の休止符となり、読者の意識を落ち着かせ、その詩がい

かなる風景を詠じたものであつたか知覚させる役割をもっている。「生春草」は、淮南王劉安の「招隱士」〔楚辭所収〕の「王孫遊びて帰らず、春草生じて萋萋たり」を踏まえたもので、同じ典故を持つ「萋萋感楚吟」句を無理なく引きだしている。この萋萋として春草生ずる池塘の景色は、憂いの繁茂を暗示したのもとしても読みとれる。<sup>(9)</sup>

「園柳」の語も詩題と密接な関係がある。この語の源を尋ねれば、「古詩十九首」〔文選〕巻二十九）に行きつく。其二に、「青青河畔草、鬱鬱園中柳。盈盈楼上女、皎皎当窗牖（青青たり 河畔の草、鬱鬱たり 園中の柳。盈盈たり 楼上の女、皎皎として窓牖に当たる）」とあり、すでに「園柳」と言えば、楼閣と女性の姿が想起される。女性のイメージは後の「園歌」の繋を采る女のイメージに繋がっていく。<sup>(10)</sup>「変鳴禽」も、やはり後の「祁祁傷園歌」に対応している。「園歌」は幽風・七月を指す。その第二章に、「春日載陽、有鳴倉庚（春日 載ち陽かく、鳴く倉庚有り）」と見え、同じ章に、「春日 遲遲たり、繋を采る 祁祁たり」とある。「倉庚」はウグイスのことで、劉良が「鳴禽は、鶯なり」と注したのはこれを意識したのであろう。このほか、小雅・出車の第六章にも、「倉庚啾啾、采繋祁祁」と見え、「鳴禽」と「祁祁」の強い関係性が窺える。この麗

らかな春の光景も、春草同様に憂いを引きだす機能をもっている。<sup>(11)</sup>

このように見ていくと、「池塘生春草」の二句は、一見なんの変哲もない語でありながら、実は緻密に練られた措辞であることが分かる。「当に神を以て会すべし」と言った王漁洋も、こうした詩句を尊んでいる。

⑧ 作詩用事、以不露痕跡為高。往董御史玉虬文驥、外遷隴右道、留別予輩詩云、「逐臣西北去、河水東南流」。初謂常語。後読『北史』、魏孝武帝西奔宇文泰、循河西行、流涕謂梁禦曰、「此水東流、而朕西上」。乃悟董語本此、深歎其用古之妙（『池北偶談』巻十二、「用事」）。

（作詩の用事、痕跡を露はさざるを以て高しと為す。往に董御史玉虬文驥、隴右道に外遷せしとき、予が輩に留別するの詩に云ふ、「逐臣は西北に去り、河水は東南に流る」と。初め常語と謂へり。後に『北史』を読めば、魏の孝武帝西のかた宇文泰に奔るとき、河に循ひて西行し、涕を流して梁禦に謂ひて曰く、「此の水は東流するに、而るに朕は西上す」と。乃ち董の語これに本づくを悟り、深く其の用古の妙に歎ず）。

謝靈運の「池塘生春草」は、平生の言葉のように見えて、

その実、典故を交えながら、詩全体の調和をも意識した措辞となっていた。しかも、その特異性によって多くの詩評家の興趣を引いた。措辞に用意工夫を凝らして人の興趣を引くことを旨とした、漁洋の所謂「神韻」を有していると言うことができる。

### 三、「手揮五絃、目送歸鴻」について

①において、「池塘生春草」を引きだすきっかけとなった嵇康の句についても見ておきたい。謝靈運の句と同様に位置づけているからには、嵇康の句にも謝靈運の句と同様の特徴が見いだせるはずだからである。まず、詩全体を挙げる。詩は「贈秀才入軍」(『文選』卷二十四)という連作の一首である。

⑨息徒蘭圃、秣馬華山。流磻平阜、垂綸長川。目送歸鴻、手揮五絃。俯仰自得、游心泰玄。嘉彼釣叟、得魚忘筌。郢人逝矣、誰与尽言。

(徒を蘭圃に息はしめ、馬を華山に秣ふ。磻を平阜に流し、綸を長川に垂る。目は歸鴻を送り、手は五絃を揮ふ。俯仰自得し、心を泰玄に遊ばしむ。彼の釣叟の、魚を得て筌を忘るるを嘉す。郢人逝きぬ、誰れと与にか言を尽くさん)。

嵇康の兄公穆が従軍する際に贈った詩。兄は従軍中の生活の中で「泰〔太〕玄」に遊心して「彼の釣叟」の境地を得る。嵇康はそれに好感を覚え、心を通い合わせられる人のいなくなってしまうことを悲しんでいる。「蘭圃」・「秣馬」・「垂綸」・「太玄」など放逐・従軍・道家的といった特定のイメージを含んだ語や、「得魚忘筌」・「郢人逝矣」などの「莊子」を典故とする句の間であって、「目送歸鴻、手揮五絃」は、とりわけ平生の語と見做すことができよう。

しかし、この二句も特定のイメージを含んだ語と典故をもっている。「歸鴻」は、漢の使者として匈奴に赴いた蘇武がそのまま抑留された時、雁の足に手紙を結んで飛ばし、その存命を漢に報せた故事が思い起こされる(『漢書』卷五十四・蘇武伝)。従って、辺塞・帰思といったイメージがある。「五絃」は、舜が五絃琴を弾いて「南風」を歌って天下が治まったという事が想起される(『淮南子』詮言訓)。因って、秦平のイメージがある。また、李善注も指摘するところであるが、「手揮五絃」は張衡「帰田賦」(『文選』卷十五)の「彈五絃之妙指、詠周孔之図書(五絃の妙指を弾じ、周孔の図書を詠ず)」を意識している。この「帰田賦」は、「逍遙聊以娛情(逍遙として聊か以て情を娛し、ましむ)」・「仰飛織繳、俯釣長流(仰ぎて織繳を飛ばし、

俯して長流に釣る)・「苟縦心於物外、安知榮辱之所如(苟くも心を物外に縦にせば、安んぞ榮辱の如く所を知らんや)」など、嵇康詩の措辞に共通するところが多い。「帰田賦」のこれらの句は、「五絃」を弾じた舜・「周孔(周公・孔子)」などの古代の聖賢を慕い、俗世の榮辱に拘らない隱逸への憧れが込められている。<sup>(13)</sup>嵇康の詩はこれらの句を踏襲することで、従軍した兄の心情や性格までも象徴的に表現することを可能としている。その導入を助けるために「手揮五絃」と「目送歸鴻」がある。この二句を詩中に置くことで、蘇武の故事と「帰田賦」とを意識させ、暗に帰思と隱逸の気分を強調している。詩のテーマとの調和をもたらず句といえる。謝靈運の「池塘生春草」の句と同じく、常用の語に見えても、その実、緻密に練られた句である。

ところで、①において顧愷之がこの二句を画材としたとき、「目送歸鴻」のほうが難しいとしているのは、顧愷之が人の体よりも瞳を描くことに苦心していたことと関係している<sup>(14)</sup>のであって、詩においてはこの二句に優劣があるわけではないと考える。ただ、描かれる人の感情や表情、雰囲気<sup>(15)</sup>を決定するのが瞳や視線であるのなら、それは容易に描けるものではなく、所謂「象外の妙」を描出するのに「素養」と「才能」が不可欠である点は詩と共通する。

### おわりに

「池塘生春草」は、その制作にまつわる伝説も相俟って、早くから色々な詩評家たちが妙を論じてきた。特にその句のみをとりあげて論じたために、却ってその妙意を曖昧にし、李元膺のように有名無実の感を抱くものまでいた。その主な理由は、「古今の佳句、此の一聯の上に在る者尚ほ多し」というものであった。なぜそのように感ぜられるのかといえば、それは③が言うように、普段から話しているような言葉でつづられた自然な語に見えるからである。王漁洋はこの「池塘生春草」に「神韻」があると見做していた。「神韻」とは、用意工夫を凝らして練り上げられた措辞によって、興趣を引き起こさせるはたらきを持った詩、あるいは、作詩法である。即ち、この謝靈運の句は、ただ風景を述べただけの単純な語ではないことを示す。そして、この句が「精工」なものであることは、既に宋代から指摘されていたことであった。

そこで、あらためてこの句の妙意を探るために、詩全体を俯瞰することで、その句がほかの句と比してどこが特別なのか、詩中にいかなる作用をもたらしているのかを考察した。すると、該当句がその詩全体の中でもとりわけ尋常

の語で構成されており、それによって、却ってほかの句よりも際立って見えることが分かった。しかし、該当句を丁寧調べていくと、典故にもとづいた表現がなされており、しかも他の句とも調和がとれている緻密な措辞であった。一見、なんの変哲もない句にして、実は緻密に練りあげられた句を漁洋は尊んだ。このような詩句は、②に挙げられた「神韻」の詩と、その特徴を異にするものではない。従って、「池塘生春草」には確かに「神韻」ありと見做すことができる、その妙意はこうした修辭性にあると言える。

その作品に施された修辭を覚ることで、その味わいが増していく。さりげない修辭に気がつくことで、さらなる秘奥はないかと探る探究心も湧いてくる。人の興趣を引き感動させようとする詩人と、興趣を引かれ味わいを求める読者との間で知的興趣が共有される。「神韻」を有した佳句を佳句たらしめる理由は、さりげない言葉の中に秘められている。当に神を以て会さねばならない。

#### 注

- (1) 王漁洋の「神韻」に関しては、拙論「王漁洋の『神韻』——『花草蒙拾』に見える史達祖・李清照詞を中心に——」(『中国文学』第七十一号、二〇一三)、及び、「王漁洋の『神韻』考——陳子龍の詩詞を中心に——」(『筑波中国学文化論叢32』、二〇

一三)を参照。

- (2) 鈴木修次・高木正一・前野直彬『中国学文化叢書5・文学史』(大修館書店、一九六八)Ⅲ「六朝文学論」1「詩」(中村嘉弘・鈴木修次執筆)を参照。当該書は、その概観において、晋の太康時代以降、文学の担い手は貴族が中心となり、対句や典故、四声などの音声美に関心を寄せ、「以後この時期に表れた修辭主義が詩の主流となり、初唐に至るまで続くのである」とも述べている。

- (3) 梁・鍾嶸『詩品』卷中・宋法曹参军謝惠連に引く「謝氏家録」に、「康樂每对惠連、輒得佳語。後在永嘉西堂思詩、竟日不就。寤寐間、忽見惠連、即成『池塘生春草』。故嘗云、『此語有神助、非我語也』(康樂、惠連に対する毎に、輒ち佳語を得。後、永嘉の西堂に在りて詩を思ふも、竟日、就らず。寤寐の間、忽ち惠連を見、即ち『池塘、春草生ず』を成す。故に嘗て云ふ、『此の語、神助有り、我が語に非ざるなり』と)とある。

- (4) 南宋・釈惠洪『冷齋夜話』卷三に、「舒公云、『池塘生春草、園柳變鳴禽』之句、謂有神助、其妙意不可以言伝。而古今文字多從而稱之、謂之確論。独李元膺曰、『予反覆觀此句、未有過人处、不知舒公何從見其妙』。蓋古今佳句在此一聯之上者尚多。古之人意有所至、則見于情、詩句蓋其寓也。謝公平生喜見惠連、夢中得之、蓋當論其情意、不当尼其句也(舒公云ふ、『池塘、春草生じ、園柳、鳴禽變ず』の句、神助有り)と謂ふ、其の妙意言を以て伝ふべからず」と。而して古今の

文士 多く従ひて之れを称し、之れを確論と謂ふ。独り李元膺のみ曰く、「予 反覆して此の句を觀るも、未だ人に過ぐる処有らず、知らず 舒公 何に従りてか其の妙を見る」と。蓋し 古今の佳句 此の一聯の上に在る者尚ほ多し。古への人意に至る所有れば、則ち情を見はず、詩句は蓋し其の寓なり。謝公 平生 惠連を見るを喜び、夢中に之れを得、蓋し当に其の情意を論ずべくして、当に其の句に尼むべからず」とある。

(5) 戴鴻森箋注『葦齋詩話箋注』(上海古籍出版社、二〇一二)

卷二・第二十四条に、「不能作景語、又何能作情語邪。古人絶唱句多景語、如(詩句省略)、皆是也。而情寓其中矣。以写景之心理言情、則心身中独喻之微、輕安拈出。謝太傅於『毛詩』取『訏謨定命、遠猷辰告』、以此八字如一串珠、將大臣經營国事之心曲、写出次第。故与『昔我往矣、楊柳依依。今我来思、雨雪霏霏』同一達情之妙(景語を作ること能はずんば、又た何ぞ能く情語を作らんや。古人絶唱の句は景語多し、……の如きは、皆是れなり。而して情 其の中に寓す。写景の心理を以て情を言へば、則ち心身中の独喻の微、輕安に拈出す。謝太傅『毛詩』に於いて『訏に謨りて命を定め、遠く猷りて辰に告ぐ』を取り、此の八字を以て一串珠の如くし、大臣の国事を經營するの心曲を得て、次第を写し出だす。故に『昔 我れ往く、楊柳依依たり。今我来たる、雪雨りて霏霏たり』(『小雅・采薇』)と達情の妙を同一にす」とある。一般に「謝太傅」といえば、晋の謝安を指すが、同書卷一・

第十一条に、「知『池塘生春草』、『胡蝶飛南園』之妙、則知『楊柳依依』、『零雨其濛』之聖於詩(『池塘 春草生ず』、『胡蝶 南園に飛ぶ』(張協・雜詩十首其八)の妙を知れば、則ち『楊柳依依たり』、『零雨其れ濛たり』(『幽風・東山』)の詩に聖たるを知らん)」とあるので、ここでは謝靈運のことと解する。

(6) 毛伝に、「采薇、遣戍役也。……遣戍役、以守衛中国、故歌采薇、以遣之(采薇、戍役を遣るなり。……戍役を遣はし、

以て中国を守衛す、故に采薇を歌ひ、以て之れを遣る)」とある。また、第六章(『昔我往矣』以下の章)第八句の毛伝には、「君子能尽人之情、故人忘其死(君子 能く人の情を尽くす、故に人 其の死を忘る)」と、この詩の効用を述べられている。

(7) 李善注に、「馬融『論語注』曰、『作、慙也』、『説文』曰、『痾、病也』とある。『文選』では、『作』字は当該詩にしか

見えないのに対し、『慙』字は四十一例、『愧』字は四十八例見える。同書において、『痾』字は五十六例ある。なお、『玉台新詠』には「作」・「痾」共に見えない。

(8) 李善注を挙げる。「初景 以下二句、『楚辞』曰、『款秋冬之緒風』。王逸曰、『緒、餘也』。『神農本草』曰、『春夏為陽、秋冬為陰』(『楚辞』)に曰く、『秋冬の緒風を款く』と。王逸曰く、『緒は、餘なり』と。『神農本草』に曰く、『春夏を陽と為し、秋冬を陰と為す』と。『祁祁』以下二句、『毛詩』『幽風』曰、『春日遲遲、采芣祁祁』。『楚辞』曰、『王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋』(『毛詩』『幽風』に曰く、『春日遲遲たり、芣を采る

祁祁たり」と。「楚辞」に曰く、「王孫遊びて帰らず、春草生じて萋萋たり」と」。

(9) 「詩経」小雅・杖杜の第二章に、「有杖之杜、其葉萋萋。王事靡盬、我心傷悲（杖たる杜有り、其の葉 萋萋たり。王事 鹽きこと靡し、我が心 傷悲す）」とあり、第一章の鄭箋に、「婦人思望其君子、陽月之時、已憂傷矣（婦人 其の君子を 思望し、陽月の時、已だ憂傷す）」とある。「杖杜」の葉が茂るの暮春の事と集注に見える。

(10) 「春日遲遲、采繁祁祁。女心傷悲、殆及公子同歸（女心傷悲す、殆めて公子と同一に帰せん）」。

(11) 「春日遲遲」以下四句の鄭箋に、「春女感陽氣而思男、……是其物化所以悲也（春女 陽氣に感じて男を思ふ、……是れ其の物化の悲しき所以なり）」とある。

(12) 「得魚忘筌」は、目的を達成したら、その道具のことを忘れること。手段に固執するのではなく、己の欲するもの（真理）をこそ、ひたすらに追究すること。嵇康の詩では、「自得」によつて真理を悟つた兄のことをいう。「莊子」外物篇に、「筌者所以在魚、得魚而忘筌。……言者所以在意、得意而忘言。吾安得忘言之人而与之言哉（筌は魚に在る所以なり、魚を得て筌を忘る。……言は意に在る所以なり、意を得て言を忘る。吾れ安にか忘言の人を得て之れと与に言はんや）」とある。

「郢人」は、気の置けない人。自分を理解し、その能力を引き出してくれるような人。嵇康の詩では兄のこと。「莊子」徐無鬼篇に、「莊子送葬、過惠子之墓、顧謂從者曰、「郢人堊慢其

鼻端若蠅翼。使匠石斲之。……尽堊而鼻不傷、郢人立不失容。宋元君聞之、召匠石曰、「嘗試為寡人為之」。匠石曰、「臣則嘗能斲之。雖然、臣之質死久矣」。自夫子之死也、吾無以為質矣、吾無与言之矣」（莊子 送葬して、惠子の墓に過り、顧つて從者に謂ひて曰く、「郢人 其の鼻端を堊慢して蠅翼の若し。匠石をして之れを斲らしむ。……堊を尽くして鼻は傷つかず、郢人 立ちて容を失はず。宋元君 之れを聞き、匠石を召して曰く、「嘗試みに寡人の為に之れを為せ」と。匠石曰く、「臣 則ち嘗て能く之れを斲る。然りと雖も、臣の質 死して久し」と。夫子の死して自り、吾れ以て質と為すもの無し、吾れ与に之れを言ふもの無し」と）とある。

(13) 齋藤希史氏は、隱者の読書が俗世から離れた境地へ誘う手だてとして用いられる例として、「帰田賦」にも言及している（『漢文スタイル』「隱者の読書、あるいは田園の宇宙」羽鳥書店、二〇一〇。十頁）。

(14) 『世説新語』巧芸篇に、「顧長康画人、或数年不点目精。人問其故、顧曰、「四体妍蚩、本無関於妙处。伝神写照、正在阿堵中」（顧長康 人を画くに、数年も目精を点ぜざる或り。人 其の故を問へば、顧曰く、「四体の妍蚩、本より妙処に關する無し。神を伝へ照を写すは、正に阿堵の中に在り）」とある。

（宇都宮大学非常勤講師）